質的インタビューにおける権力の非対称性の見逃された問題

インフォーマントはインタビュアーを助けられないのか

○増田 匡裕

(高知大学 教育研究部 人文社会科学系 人文社会科学部門)

キーワード: 質的インタビューの研究倫理 権力 ナラティブ

An unnoticed problem in asymmetry of power between an interviewer and an interviewee:

Could an informant take care of a researcher unready for interviewing?

Masahiro MASUDA

(Faculty of Humanities and Social Sciences, Kochi University)

Key Words: Ethics in qualitative interviewing. Power. Narrative.

目 的

インタビュー法は、心理学を含む行動科学の質的研究において最も重要な研究方法であり、優れた方法論のテキストも数多く出版されている(e.g. Kvale, 1996)。構成主義・構築主義的な立場に立つ質的研究者は、インタビューで得られるデータはインタビューの外部にある現実ではなく、インタビュアーのトークを軸とした共同構成によるトピックであると主張している(Rapley, 2001)。それ故、インフォーマントのパーソナルな意味が研究者によって解体され矮小化されることの倫理的問題の解決に取り組む研究者も多い(Holskin & Stoltz, 2005)。質的研究者の多くが研究する側とされる側の権力(power)差に敏感であり、研究者がインフォーマントを抑圧しない技術の開発を試行錯誤している(Nairn et al., 2005)。

質的研究の倫理の問題として取り上げられることが多いのは、研究者によるインフォーマントの“搾取”である。本来はインフォーマントの“声なき声”を掘り上げる筈の研究が、研究活動に内在する研究者の権力(power)によってインフォーマントを無視した研究者本位のものとなるおそれがある。データはそもそも誰のものなのかという議論は、ケーススタディにおいては特に重要となる(Simons, 2009)

研究者の権力による倫理違反は、研究者自身による恣意的なデータの除去である。この倫理違反は研究者が理論面及び技術面で未熟な場合に発生し得る。通常は未熟な研究者によって収集されたデータが分析対象となることはあり得ない。しかしながら、本稿では例外的な事例を発表する。

方 法 ・ 結 果 ・ 考 察

発表者自身のオートエスノグラフィに、Reissman(1996)のナラティブ・アナリシスの手法を用いて分析を行う。

発表者は、周産期の喪失体験の当事者と援助者との信頼関係を分析する研究を実施している。ある年の初秋、発表者MはL県V市所在の大学看護学部P教授から、グリーフケアをテーマに修士論文(非公開)を執筆中の社会人院生Q(看護師)の研究のインフォーマントになることを依頼された。発表者MはP教授に対して、自らが当事者であり且つグリーフケアの研究者であることを開示して、研究対象者資格を確認した。発表者(インフォーマント)はV市内に別用が2件(午後と夕方)あり、午前10時から90分のインタビューが長引いた場合は、所用の後、予備セッションを設けるという計画で、院生Qが指定したV市内の場所に向かい。延べ4時間半にわたるインタビューは21時に時間切れとして終了した。しかしながら、16時からの予備セッションの直前、インフォーマントである発表者Mは、院生Qの収集した午前中のデータを聞いたP教授(院生Qによるインタビューの間は席を外していた)から、発表者Mはインフォーマントとしては不適切であることを告げられ、データ収集を中止したい旨、打診された。イ

ンタビューにおける発表者Mの発言が、人選ミスであるかのような誤解を生んだということである(国内の事例のみが研究対象との説明が後になされた)。従って、この院生Qの発表者Mに対するインタビューは、院生Qの執筆した非公開論文のデータには含まれていない。一方、院生QがP教授の立ち会いの下、発表者Mに対して録音の許可を求める際、発表者Mも自身のオートエスノグラフィのデータとするため、同時に自身のICレコーダーに録音することの許可を求め、承諾を受けている。また、インタビューの中身に無関係の会話(院生Qに対して、質問の仕方を工夫するようインフォーマントのMが助言する場面など)で録音は停止している。

研究対象外との判断を生んだ要因をナラティブの構造の中に求めるため、QによるMへのインタビューから、Mの発話のみを取り出し、Reissmanの手法でスタンザ(stanza)に分けて構造を分析する。デモグラフィック変数を語るスタンザの後、Mが3件の喪失体験を持つという全体の構成を示すスタンザが続き、第1の喪失体験を語るスタンザが続く。

その後、Mの語りは超音波診断に関する日米の医療現場の文化の違いと、臨床心理学的な研究の知見に移る。これらをテーマとしたスタンザが、インタビュアーであるQの質問に促された発話ではなく、Mが先手を取って出したものであることで、このナラティブが外国滞在記の性質を帯びる：

あつ、もう少し詳しくその説明しなきゃいけないのは。

/ そのとき、日本にいないんです。/(後略)。

まあ、その一方で。/ あの一、エコーの画像がねえ。

/ あ、母性、父性に与える影響とか、そういうふうなものっていうのは。/ あ、結構論文ありますけどね。

/ うん。ただ、あー、さすがにその日本みたいにですね、かなり早いうちからもう。(後略)。

喪失を主題とした共同構成のナラティブとするため、語り手が行った補足的説明が仇となり、異なるジャンルのナラティブとして構成された。そのためナラティブの「場面」が異なり、聞き手の意味生成が困難となったと考えられる。

引用文献

- Holskin, M. & Stoltz, J.-A. (2005). Fear of offending: Dislosing researcher discomfort in analyzing. *Qualitative Research*, 5, 95-111.
- Kvale, S. (1996). *InterViews*. Thousand Oaks, CA. Sage.
- Nairn, K., et al. (2005). A counter-narrative of a 'failed' interview. *Qualitative Research*, 5, 221-244.
- Rapley, T.J. (2001). The art(fulness) of open-ended interviewing: Some considerations of analysing interviews. *Qualitative Research*, 1, 303-323.
- Reissman, C.K. (1996). *Narrative analysis*. Sage.
- Simons, H. (2009). *Case study research in practice*. Sage.